

御供泰治教授の定年ご退職によせて

石原英子

御供泰治先生は平成16年3月31日をもちまして定年ご退職されることになりました。先生は、本看護学部の前身である名古屋市立大学看護短期大学部が新設された昭和63年4月1日に本学医学部第二内科学教室より教授としてご就任され、以来、看護短期大学部での11年間と看護学部での5年間の計16年間にわたり看護学の教育・研究と学部の管理・運営にご尽力してこられました。

看護短期大学部では「疾患論、臨床検査学、免疫学」を、また、看護学部となつてからは「疾病・病態論、基礎ゼミ」を授業担当され、この間、健康科学「内臓年齢の意義」を研究テーマとされました。最近実施された学生による教員評価（「疾病・病態論」の授業評価）では看護学部教員25名中の第一位でありました。また、非常勤講師「血液内科学」をされていた愛知医科大学での学生による教授評価で、多数の教員の中でベスト3に入っておられました。これらの結果は、先生が「難しい事を易しく、易しい事を面白く、面白い事を奥深く」表現することができるまれにみる才能の持ち主である所以と感じ入っております。先生のこの才能は「内臓年齢の意義」のご研究の進展と世論の志向の高まりに伴って、医療従事者のみならず国民の「健康科学」の理解度の向上に大きく貢献されています。例えば、先生の著書「内臓年齢」は「〇〇年齢」という言葉を流行させました。さらに中国語に翻訳されて「医生我有問題—健検報告=健康狀況嗎?」という題名で台湾で出版されています。また、「内臓年齢からの警告」に続き、厚生労働省認定の出版社から新たに「内臓年齢は警告する」という小冊子が発行され、全国の保健所・保健センターを通して、多くの国民に対し健康科学の啓蒙に役立っています。著書「たとえて学ぶ免疫学 第2版」では入門書とされるものでもなお難解さを味わうことの多い免疫の本の中で、「本書がそうした入門書のための入門書の役割を果たす事が出来れば満足」と目的を述べておられます。その目的通りに、「始めて免疫の本を最後まで読んだ。かつて若い頃に学んだ抗原抗体反応の点と点を線で結ぶ事が出来た。」といった感想が多く寄せられたこと、また書評として、これを機会に入門書というもののあり方について考え直

すべきと高く評価を受けておられる事を知りました。本学薬学部の卒後教育講座で「たとえて学ぶ免疫学」と題してご講演をしていただき薬剤師に免疫の教育をしていただいたこともありました。エイズや臓器移植など、免疫の知識なしには論じられない問題が身の回りに多い状況下でマスコミにも本書は再三取り上げられ、看護学生のみならず、看護師、薬業界従事者、海外協力隊のメンバーの若者たちと多くの方々の知識に役立っています。また、著書「おもしろ看護血液学」のおかげで筆者は始めて「貧血」を理解する事ができ、点と点を線で結ぶ事ができました。この他、看護関係の著書として「おもしろ看護老年病学」、「わかりやすい内科学 第2版」、「デルカン先生の薬まるくん」、毎年ベストセラーズに入る国試直前対策ブック「デルカン」などを出版されておられます。以上のような教育・研究・啓蒙活動と平行して、学部の管理・運営に携わってこられ看護短期大学部において学部長を三期、5年間にわたり既設の学部、施設との太いパイプ役を、また全国会議では学長に準じたお立場をこなしてこられました。特に看護短期大学部の最後の学部長をされた平成10年4月から11年3月は看護学部設立準備の時期であり、設立準備委員会総務専門部会の部会長として開設に向けてご尽力されました。そして平成11年4月、看護学部発足と同時に大学の評議員として15年3月までの二期にわたり大学全体の運営に参画してこられました。

一方、学外役員として日本血液学会評議員、日本臨床血液学会評議員、日本内科学会東海地方会評議員、日本成人白血病研究会（JALSG）効果安全性評価委員の他に4つの学会会員として研究活動をされました。この間に文部省科学研究費助成、東海学術奨励会研究助成金（2回）、今永医学奨学基金（5回）などの多くの研究助成を受けられました。そして、その成果を著書35冊、原著論文131編、学会発表225回、シンポジウム発表（国際1回、国内5回）として公表してこられました。

「私は山形県生まれで名古屋育ちです」と先生はさりりと自己紹介されてますが、戦前戦後の逆境を美事に順境としてこられた蔭にご聡明なご母堂様の教育方針があっ

御供泰治教授の定年ご退職によせて

たことを「母が私に残した物（母校愛知県立明和高等学校における講演内容）」で垣間見ることが出来ます。ご尊父様が戦死され、戦争未亡人となられたご母堂様は弟君と共に故郷の名古屋へ戻られ「食と学」ではできるだけ努力して、丈夫な体と、少しでも多くの知識を身に付けるという教育方針でお育てになりました。英語が国際語となると判断され「カムカム英語（平川唯一）」をご一緒に勉強されたり、中学生になられたときは、進駐軍の将校が利用していた和合ゴルフでのキャディーのアルバイトを見つけてこられ、生の英語の環境に置かれたそうです。南山大学文学部英文科にご在学中、シュバイツァーの「わが生活と思想より」を読まれ、36歳で一切の名声を投げ捨てて医師になりアフリカ救済への道を選んだ博士のことを知った先生は、説明のしようもないほど心を揺さぶられ、再受験されて医学の世界へ入ってこられました。そして、英語が話せない人の多かった時代にあって使いこなせる英会話と、二つの大学でドイツ語の基礎を身に付けられたことが医学の世界で大きな力となり、大学院修了3ヶ月後には、学位論文「生体条件による白血球数の変動について」でアメリカ留学のチャンスに巡り会い、そしてこの分野で最高峰になられた絶好のテーマ「白血病の細胞回転」を得られました。ニューヨークのスローン・ケッタリング癌研究所で2年間、助手付きの研究生生活では、ご成果に加えて内外の多くの人脈を得たことの大切さを記述しておられます（本学医学祭記念誌、平成2年）。

先生は何事も極めて早く仕上げるタイプの方であるからこそ、上述のように教育・研究と管理・運営の両輪を強力に駆動させてこられました。学生時代、硬式野球のエースであった丈夫なお体はとてご定年とは思われません。

平成16年4月からは、先生のご退職を待つように新設される愛知きわみ看護短期大学へのご予定と伺っております。沢山の選択肢の中から引き続き看護の世界で教育者としての道を選ばれたこと、ご活躍くださることを嬉しく思い、ますますのご健勝を祈念しております。